

胚盤胞移植についての説明書

秋田大学医学部産婦人科
生殖内分泌外来 2005年4月

用語として胚盤胞移植と長期培養と胞胚期移植とは同様のことを指しています。受精卵は受精後、4細胞期胚、桑実胚、胞胚、と発生していきます。(下図参照)

1. 受精胚の発生・着床

自然妊娠では受精胚は卵管内で受精し、2細胞期、4細胞期と発生し、胞胚になってから子宮内にきて、着床する(妊娠する)とされています。従来、体外受精胚移植法では4細胞期胚以降の培養は不可能であり、4細胞期胚を子宮内に戻していました。自然妊娠では4細胞期胚はまだ、卵管にあるのに体外受精では子宮内に戻すことは非生理的(自然妊娠と違う)であると考えられます。しかし、4細胞期胚を移植しても約20%程度の妊娠率があり、十分に妊娠は期待できます。

最近、体外受精に用いる培養液の進歩により、胞胚まで体外で培養することが可能になりました。胞胚を子宮に戻せば、子宮内膜も胞胚を受け入れるのに適した状態にあると考えられるので妊娠率が著しく向上すると考えられていました。しかし、実際には妊娠率はそれほど上昇するわけではありません。

2. 問題点

一方、胚盤胞移植の問題点としてはすべての4細胞期胚が必ず胞胚まで発生するわけではなく、途中で発生が停止してしまうこともあります。また、胚盤胞移植は一卵性双胎が増えるという報告もあります。

3. 治療方針

現在、体外受精の治療方針としては形態的に良好な4細胞期胚移植を数回行って妊娠に至らない場合、胚盤胞移植を行っています。

